

〈故藤澤益夫前学長の絶筆〉

「三田評論」2004年10月号所収

揺りかごから墓場まで

藤澤益夫

(慶應義塾大学名誉教授・
田園調布学園大学前学長)

象牙の塔と評されるように、これまでの大学は、とかく時流に鈍感で、ときには鈍さを伝統の名のもとに自負さえして、必要な改善になかなか手を着けず、いったん始めると陳腐化してもだだ止まりしない性癖があった。

この惰性の塊のような大学も、ようやく環境の圧倒的激変、とくに少子化による進学者減少に揺さぶられて、今春も私大四年制の三割・短大の四割が定員を割り、二、三年後には大学全入時代を迎えるのである。

いまの大学の窮状を端的にまとめると、需給逆転の悩みにほかならない。ブランド力をもたない多くのローカルな私大は、それこそ「生き残り」に汗みどろになっている。しかし、「生き残り」とは、本末を転倒した発想とわたくしには思われる。けだし、それはどん尻であろうと、ともかく存続さえすればいいと受けとれて、なりふりかまわず受験者を掻き集めることにつながる。揚句は、学生の質の低下と意欲の希薄さを歎く仕儀にいたる。

「改革は内から発するもので、外からもたされるものではない」とは、ギボンの至言。進学者激減という外圧に迫られた受け身の改革は、所詮、譲歩と妥協に傾き、本質的に最小限の対応にとどまろうとして、目標を曖昧にしてしまう。ここにおよんでは、危機は外にはではなく、内にこそある。

わたくしの在職する小さな大学は、大正末に開かれた女学校（現・田園調布学園中等部高等部）を母体として、戦後、教養系の女子短大を川崎市北部に併設したところに起点をもつ。したがって、ご多分にもれず、時代の大波にさらされて、存続を危ぶまれる窮地に陥った。そこで、十年ほど前、大学の新しいレーゾンドートルをもとめ、将来を見定めるためのグランドデザインの検討にとりかかった。

策定の前提は、時の流れがどう移ろうとも、若い人びとに思考力をつけ、行動力を育てる高次教育への要求が衰えるはずがないという事実である。このなかでの課題は、創立以来八十年揚げてきた学園の校是「捨我精進」=ヒューマニタリアニズムの鼓吹を、いかなる形で今後のわれわれの大学教育に活かしていくかであった。

大上段に構えていうと、いつどこの社会でも、本来、目指すところは、人びとの福利厚

生を増すことに置かれているはずである。ところが、その近道と信じて一直線に走ってきたインダストリアルリズムの世界は、たしかに豊かさを見事に達成したものの、反面で、いたるところに反目や対立、疎外を増幅している。

むろん、福祉は、反目と対立からは生れず、そのアンチテーゼたる友愛と協調のなかに根がある。価値観の多元化し分裂しがちな現代世界をたがいに結びつけることのできるキーは、おもいやりであり、やさしさであろう。そうであるなら、豊かさのインダストリアルリズムの柱と並んで、融和のヒューマニタリアニズムの柱を社会のもうひとつの機軸に据えねばならない。

こうした認識にたてば、われわれの学園の方途は、おのずからしぼりこまれてくる。自分たちの福祉社会を、明日の共生社会をつくろうとする若い人の準備を確実に助け役割遂行能力を高めるために、構成を転換特化して、微力ながら時代の要請に的確に応じなければならぬということである。

具体的には、社会福祉と介護福祉の要員養成の学科を新設することであった。学園にとって、はじめての分野へのチャレンジであったから、まず短大として発足し、経験と実績を積むテイクオフの過程をへて、一昨年、四年制共学の人間福祉学部へ発展させた。

目下、つぎの計画段階に進んで、再来春には保育系学科増設を用意している。これによって、いふなれば、揺りかごから墓場までをカバーして、福祉社会に直接参加貢献し、そのシステムを築こうと志す若人の熱意をまっすぐ受けとめることを期している。

むさし野もはてなる丘の茶摘かな

——秋桜子

お礼

本文は、慶應義塾の許可を得て、「三田評論」2004年10月号、No.1072より転載させていただきました。転載をご快諾いただきました慶應義塾のご厚意に深く感謝申し上げます。

「三田評論」編集部によりますと、故藤澤益夫前学長は急逝される2週間ほど前に本原稿を編集部にお持ちになったということで、この文章が、藤澤益夫先生の絶筆と思われます。ここに掲載させていただき、藤澤先生のご冥福を謹んでお祈り申し上げます（紀要委員会）。